

『ぼくらのアフリカに戦争がなくなるのはなぜ?』

小川真吾著 合同出版 2012年

おやさと研究所准教授

森 洋明 Yomei Mori

本書は、アフリカで現在も続く紛争を取り上げ、戦闘がなくなる原因が「アフリカだけにあるのではなく、歴史的な背景や先進国の利害と深い関わり」(本書3頁)にあることを、著者自身のアフリカでの体験や現場で収集された証言も交えながら、歴史的背景から読み解いていく。

「アフリカ」と言っただけで想起される私たちのイメージは、大自然や野生動物、豊富な地下資源、陽気な人々などがある一方で、昨年来メディアで連日のように放映されたエボラ出血熱というまでもなく、内戦や独裁制、汚職、集団レイプ、少年兵士、難民キャンプなど負のイメージも少なくない。しかし、アフリカが今日も抱えるこうした多くの問題は、アフリカだけにその原因があるのではなく、先進国も深く関与しており、歴史的に見るならば、16世紀から始まるヨーロッパに莫大な富をもたらした奴隷時代に遡ることができる。

本書ではそのような背景を持っている国の典型的な例として、コンゴ民主共和国、スーダン、ウガンダ、ルアンダを主に取り上げている。

第1章「アフリカの『世界大戦』を生きる子どもたち」では、コンゴ民主共和国の東部で今日もなお繰り広げられている紛争の背景を説明し、その原因として次のような一村長のことを引用している。「コンゴ村には伝説のハチミツがあった。それを発見した3つの村の村長は、コンゴ村にいる知り合いを味方につけて、ハチミツを奪い取る武器と戦術をあたえた。それに反発したコンゴ村の村長は、隣村に助っ人を頼んで、ハチミツを奪い合った」(10頁)。

第2章「ぼくたちの村で起こった紛争」では、多くの犠牲者を出したウガンダ紛争、スーダン紛争(死者200万人、難民400万人、徴兵された子ども10万人)、ルアンダ紛争(死者50万人)、ブルンジ紛争(死者20万人)に触れ、戦闘の犠牲になるのは常に女性と子どもたちであると指摘している。民間人の死傷者が、第一次世界大戦では全体の10%、第二次大戦では約50%、そして20世紀後半からアフリカで起こった紛争では92%(34頁)という引用されたデータは如実にそれを裏付けている。

第3章「平和だった頃のぼくらの村」では、白人が大陸に入ってくる以前のアフリカ人の暮らしぶりを紹介。人類が誕生した大地として発祥から現在に至るまで、さまざまな民族がそれぞれの文化や伝統を保ち、永年にわたって受け継ぎながら生きてきた。「自然との関わりから生まれた伝統」や「分かち合いの伝統」、あるいは「紛争を予防して解決するための知恵」は、アフリカが「ほかの氏族との交流を繰り返し、『伝統を守ること』と『変化していくこと』のバランスをよく考えながら、独自の文化と伝統を育んできた」(58頁) ことにあったと解説する。

第4章「ぼくたちの村に白人がやってきた」は、「平和だったぼくらの村」に突如やってきた白人が、「原地住民を野生動物のように捕らえ、抵抗すると容赦なく虐殺」(61頁)する時代、いわゆる「奴隷貿易」のことである。奴隷狩りの様子や三角貿易と呼ばれる背景、さらに当時の白人社会がどのようにアフリカ人(黒人)を見ていたかということにも言及している。特に、

ヨーロッパの著名な啓蒙思想家たちによる、黒人の捉え方、あるいは奴隷貿易に対する論理的解釈は大変興味深い。

第5章「資源の奪い合いがはじまった」は、ベルリン会議によるアフリカ分割から始まる植民地統治のことが解説されている。とりわけ、ベルギー王の私有地となったコンゴ(民主共和国)の非道な統治は、数百万とも一千万人とも言われる犠牲者を出し、今日にも続く同国の不安定な政治に影響を与えていることが分かる。

産業革命によって工業化した経済を支えるための資源の獲得、ヨーロッパ先進国間での競争の激化、その結果として欧米にもたらされた莫大な富は「植民地からもち出された資源や原料の搾取によって」(92頁)であると指摘する。

第6章「ぼくたちの村と心は分断された」では、植民地統治下で、同じ民族のなかに格差がいかにか広がっていったのか、また、アフリカの経済が先進国に依存していく過程を詳述する。さらに、それらの背景にある「白人至上主義」の存在の指摘も鋭い視点である。

第7章「ぼくたちの村で戦争がつづく理由」では、植民地統治からの独立に至る過程に触れ、統治のなかで同じ民族が分断された実態を明らかにする。大虐殺が起きたルアンダやブルンジの紛争は、植民地時代の分断統治が今日のアフリカに与えた後遺症を浮き彫りにしている。植民地から独立を果たしたものの、政権の座に就いた党首たちが統治能力に欠け、かつての白人統治を模倣することによって、不幸な歴史が繰り返されているのは実に皮肉なことである。

第8章「欧米中心の世界のなかで」では、石油資源を巡って南北に分断されたスーダンを取り上げ、「欧米の都合で作られる『平和』」(130頁)や「ヨーロッパ中心主義の傲慢」を糾弾する。

最後の第9章「アフリカの平和のために私たちにできること」では、そのような紛争の種を常に抱えているアフリカに対して、日本人としてできることを提案する。「資源の地産地消」や、資源の再利用のすすめ、またアフリカの自立と自治を支援する方向性などに触れ、「日本は、欧米諸国の世界にルール作りを任せるとはならず、こうしたグローバルなルール作りにもっと積極的に参加して、主導的な役割を果たす」ことの重要性を訴える。

奴隷貿易や植民地統治、民族対立や内戦など、一つひとつが大変大きなテーマであるが、それらを「戦争がなくなるのはなぜ?」という視点で展開させることで、本書には一つの筋道がつけられている。本のタイトルからも想像できるように、全体を通じて平易な文章で、写真や図も多く、歴史的な事件や用語などの解説も豊富である。アフリカを知らない人でも大変読みやすい。アフリカに興味のある人やこれから学ぼうとする人には、ぜひ一読を勧めたい一冊である。

